

平成二十六年年度 滋賀県立石山高等学校特色選抜 小論文問題用紙

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

注意…答えは解答用紙の決められた欄に書き入れなさい。

漢字はかい書で、仮名遣いは現代仮名遣いで書きなさい。

字数には句読点も含みます。

受	検	番	号

①本の価値には、ギャップがある。売れている本とか、古典として名高い本でも、自分にとってほとんど無価値にみえる本がある。反対に、ほとんど評価されていないが、自分にとって絶大な価値をもつ本もある。自分にとって価値がある本と、一般に価値があると思われる本のあいだには、ギャップがある。

また、あるときに読んで面白かった本でも、後から振り返ってみると、やっぱりくだらなかつたと思うことがある。反対に、最初に読んだときは退屈しても、後になってその真価が分かる場合もある。このように、自分にとってどんな本がどの程度の価値をもつのかは、自分の心境にも左右される。では、どのようにすれば、いまの自分にふさわしい本を見つけることができるのだろうか。あるいはどのようにすれば、本の価値を的確に判断できるのだろうか。

本の価値は、たんに「自分にとって面白い」という基準によって決まるわけではない。自分にとって面白い本を、ここでは「快価値」のある本、と呼ぶことにしよう。これに対して、「これを読めば自分の精神が成長するだろう」と期待させてくれる本は、「主観的文化価値」の高い本である。他方で、「これは多くの人の精神を成長させることに資するだろう」と期待させてくれる本は、「客観的」に文化価値のある本である。

「快価値」と「主観的文化価値」と「客観的文化価値」の三つは、互いに重なることもあれば、重ならないこともある。読書の初期の段階では、とにかく「快価値」を与えてくれる本に出会うことが、読書へのインセンティブを高めてくれるだろう。本が好きなようになるためには、「快価値」の高い本に出会わなければならない。読書に快楽を感じなければ、読書を続けていくことはできない。

ところが読書の第二段階になると、人は、快価値を「主観的な文化価値」に結びつけたくなる。まず、本に対して「快価値」を求めるだけではダメだ、という意識が芽生えてくる。自分の精神的な成長に役立つような本を求めるようになる。場合によっては、「快価値は低くても、主観的文化価値の高い本」を手にした、という欲求が湧いてくる。

そして読書の第三段階では、人は自分にとって主観的文化価値のあるものを、なるべく客観的な文化価値と重ね合わせたい、という欲求をもつようになる。多くの文化人にとって価値があるとされる本を、自分も読んでその感覚を共有したい、と思うようになる。場合によっては、自分が精神的・文化的に成長するかどうかはともかく、多くの人が「これで学んだ」という定評のある本の価値（客観的文化価値）を知りたくなる。

以上の三つの段階は、精神段階の大まかな区分であり、実際には、これらの三つに対する欲求は、並行して存在することになる。

②すると問題は、「快価値」と「主観的文化価値」と「客観的文化価値」の三つを、どのように組み合わせるかである。「本の価値を知る」とは、この三つの価値をうまく見極めながら、本を選択するための判断力（熟慮）を磨いていくことである。

(注) インセンティブ・・・動機、誘因

(橋本 努 「学問の技法」による。)

問一 波線部①について、筆者は「本の価値」には三種類あると述べている。それはどのような価値か、それぞれについて十五字以上、三十字以内で説明しなさい。

問二 波線部②について、あなたは読書において三つの価値をどのように組み合わせていくべきだと考えるか、百五十字以上、百八十字以内で書きなさい。